東山盆踊り80年

伝統の灯 次代へ (上)

会津若松市東山温泉の夏の風物詩「東山盆踊り」が8月、新型コロナ禍を経て5年ぶりに復活する。戦時中に疎開児童を励ましそうと始まった祭りは今年で80周年。会津の奥座敷と市民、観光客をつないできた伝統に、再び灯がともる。再開を機に次代へ継承する新たな模索も始まった。本番まで約1カ月。地域の人々の思いを伝える。

戦中から地域に笑顔

記憶

太平洋戦争末期。会津若松市東山温泉に東京都から児童約1400人が疎開し、各旅館に身を寄せた。「都会の子だから、あか抜けていて、かわいかったね」。東山温泉の老舗食堂「卯之家」の井上美代子さん(93)が当時を思い返す。

東山温泉に疎開が始まったのは1944(昭和19)年8月。後に見つかった名簿によると、いずれも東京都台東区の女子児童だった。親元を離れた児童を励ましそうと、盆踊りが催された。今の東山盆踊りの始まりとされる。ただ、疎開生活の管理は厳しく、井上さんも親しく交流した記憶はほとんどない。「戦時中だったから。それでも気になって、夜に旅館の様子をのぞいたりしてたね」

終戦後、井上さんの父ら地元の旦那衆でつくる東山文化会が中心となって盆踊りを継続した。夏の風物詩として定着していった。

1960(昭和35)年8月14日朝刊の福島民報1面に「夜遅くまで踊りの輪」の見出しが躍る。東山文化会と東山観光協会、福島民報社が主催する東山納涼盆踊り大会が同日から1週間催されるのを前に、13日に民報盆踊りが繰り広げられた。井上さんは「当時の盆踊りは市街地からの人が途切れず、朝方までにぎやかだった」と懐かしむ。

温泉地内の湯川に組んだ木造やぐらは何度か水で流され、その度に再建された。福島民報社は1967年、1997(平成9)年にやぐらを贈った。やぐらは今、5年ぶりの出番を待つ。「東山と言えば、やっぱり盆踊り。あの光景をもう一度見たい」。童心に帰ったような笑顔で、井上さんが声を弾ませた。

疎開児童のニュースを報じる戦時中の福島民報の記事を読み、当時に思いをはせる井上さん

―――CFで支援呼びかけ―――

東山盆踊りは8月1日から4日まで会津若松市東山温泉で開かれる。実行委員会は7月22日までクラウドファンディング(CF)で支援を呼びかけている。問い合わせは東山温泉観光協会　電話0242(27)7051へ。

東山盆踊りのクラウドファンディングのQRコード